

ジョセフ・ヴレマン著『古代の会計』(3)
—古代ギリシャの会計—

山 本 紀 生 (訳) *

Dr. Joseph-H. Vlaemminck
Accounting in Ancient Times
(La Comptabilité dans L'Antiquité):
3. Greek Accounting
(La Comptabilité en Grèce)

Norio Yamamoto (Trans.) *

Abstract

This paper is a translation of the 3rd chapter of the first section of *Histoire et Doctrines de la comptabilité* by J.H. Vlaemminck, published in 1956.

In Ancient Greek, the first banks were temples. We can discover traces of Hellenic accounting in them. However Athenian banks were established as private enterprises, and as such shared many of the features of modern Financial institutions.

キーワード

神殿、アテネ銀行、デモステネス、アゴラ

はじめに

古代ギリシャにおいて、メソポタミアと同じく最初の銀行家は聖職者であり、最初の預金銀行は神殿であった。それ故、われわれはそこにギリシャ会計の最も遠い痕跡を探さなければならない。

信者が神に捧げたささいな奉納物を彫り刻んだ石灰岩または大理石からなる多数の板がとりわけデルフォイで発見された¹⁾。この「受領書」は、神殿の行政組織および、神殿の金庫内で発見された様々な種類の貨幣循環を説明可能にしている。デルフォイの神殿の基本会計はわれわれに大麦の価格、賃金水準のようないくつかの経済的事実を教えてくれる。破壊後の神殿再建に関わる文献は輸送価格や様々な建築資材価格をわれわれに教えてくれ

*やまもと のりお：大阪国際大学経営情報学部助教授〈2002.11.18受理〉

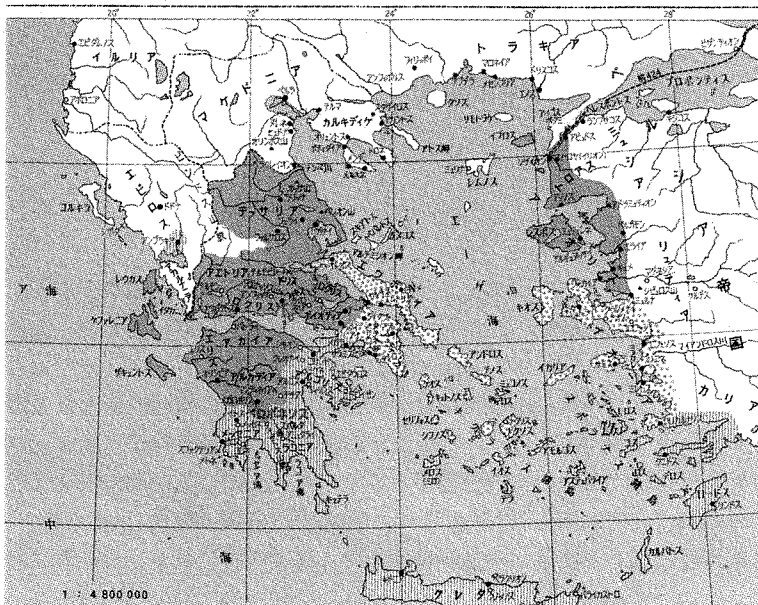
る。しかし、再建を統制するため、かつ支出に対応可能でなければならない主収入を引き受けるための創設されたナオペ(le collège des naopès)の仲間は非常に複雑な記帳をしていた。開始時点ではかなり明確に区別されていた支出カテゴリーが、収入と支出との対応が不可能な様に、すぐに重なり合った。それがナオペの会計の複雑に入り組んだ障害の理由であり、それに多少の秩序を設ける試みのため、B.C.339年に財務者の仲間(un collège des trésoriers)が創られた²⁾。会計の秩序はおよそ年代順に従い、収入は支出の前に列挙された。次いで、町や個人の税金、ファキス人(phocidiens)の返済、没収財産の賃貸料や小作料が記された。すべての特別収入は最初に表示された。支出に関して、預金に対して支払われるべき費用がまず記載された³⁾。B.C. 4 世紀の会計は、多くの正確な概念によって、古代史の最も重要な時期の経済事実に関するわれわれの知識を豊かにしてきた。

アポロンの大神殿が発見されたデロスの小島には、同様な多くの考古学的資料が埋まっている。当初、そこからアテネ同盟の国庫が発見された。発見された文献はB.C.454からA.D.90年までほぼ四世紀をカバーしている⁴⁾。

同盟の国庫がアテネに移転したのがこのB.C.454年である。そのことが純粹に世俗的な金融行政を始める契機となった。しかし、神殿は真の資本蓄積の場であり続けた。神殿は国庫であるだけでなく、国庫および個人の預金銀行として利用され、したがって、神殿は私的かつ公的な信用銀行となった。

貨幣取引の専門化を目撃するのは、BC.5世紀に入ってからである。私的銀行は神殿銀行とは別に創設された。

ヘレニズム文明の真っ只中でのアテネの威信ある役割が知られている。ギリシャにおけ



(出所：『世界の歴史4 ギリシャ』付録・森三蔵作図「古代ギリシャ要図」の部分修正図)

る知的かつ芸術的中心たるこの都市は、同時代における金融の中心地であり、また代表的な資本市場であった。広大な海洋帝国の中心地であり、スミルナ、エフェソスさらにミレトスとの継続的な商業関係を持つ、すべての国の内陸および海洋の隊商の集合基地であったアテネは、商業集約的な生活が発展し組織されるのを経験した。ピレウス、ゼア、ファレロンの3つの港は、アレクサンドリアがその役割を取り戻すまでは、発見された世界からくる生産物の中央市場であった。

銀行 (trapézites) は預金の保管者であり、信用の供与者であるが、その信用に卓越した役割を果たした。信用の機能によって、銀行は商業取引に強い推進力を与えた。自らの資本と第三者の資本を動かし、かつ他の都市および国に代理店をおき、商業社会の樹立に参加することによって、ヘレニズムの銀行は銀行会計の仕組み、小切手、銀行振替に至るまで現代金融技術のすべての要素を合わせ持っていた⁵⁾。

もともと貨幣取引をもたらししたのは、貨幣の多様性である。最初の銀行はアゴラにて机の形をした勘定台の背後に設けられた両替商であった⁶⁾。それはかなり遅い段階での商人の登場であったが、彼らは時間の経過とともに大資本家となり、農産品、工業品および交易品を掌中に収めていった。

碑名および文芸作品の資料は、アテネ銀行の技法をわれわれに説明することを可能にしている。二つの代表的な帳簿が利用されていた。ephemerides (日誌)、および trapedzitika (勘定帳簿) である。古代の作者はしばしばそれに言及していた。この点に関して、G.Perrotは次のように記している：「幸運によって、古代はデモステネスの弁論をわれわれに残した。そして、それは半世紀にわたって代わる代わる経営を担当したアルケス、パシオン、フォルミオンの三人の指導者のもとでのアテネ銀行の同一家系史をわれわれが辿ることを可能にしている。われわれはほとんど目前にかれらの財産目録を保有していると言えるであろう」。

会計の余りに簡単な知識でさえ明らかにできるような誤りのために、複数の歴史家はギリシャ人は複式簿記を用いてきたと主張してきた。われわれは、資料の同じ様な不正確な解釈がこの技法 (訳注：複式簿記) をローマ人の作とするのを見るであろう。いかなる厳密な基礎にも基づいていない根拠なき主張である。複式欄で帳簿を記帳しているという事実も、元帳または勘定帳簿を構成する要素ではない。しかも、これらの問題は、中世の単式簿記の発展およびその複式簿記への進行という展開をする際に、より深められた方法で説明されるであろう。

ギリシャ銀行は収入と支出の日付とともに彼らの手を通過した金額を帳簿に記入した。各得意先はその名前を付した開設口座をもっていた。その口座は借方に1枚、貸方に1枚を備えていた。帳簿を記帳する正確性と忠実性は帳簿に第一級の証明価値を与え、多くの場合証人を立会わずに銀行の金庫に金銭を支払うことができる程であった。争いが生じた場合、裁判所に提出された帳簿はいざこざを解決した。

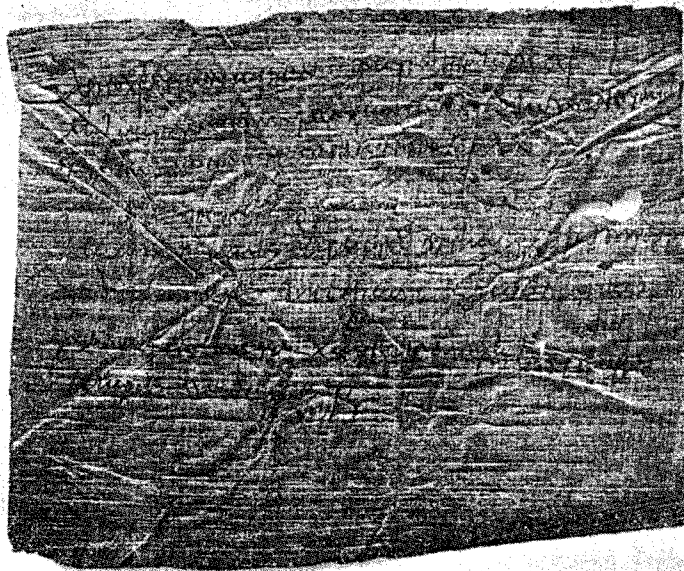
カリプセスに対するデモステネスの弁論はわれわれにギリシャ銀行の店舗を理解させてくれる：「すべての銀行は、ある個人が第三者に支払わなければならない資金を預金に預けるとき、第一に預金者の名前と支払金額、第二に傍注として<裏書>を帳簿に記入した。

もし受け入れるべき者が彼らに知られているなら、この記述で十分である。しかし、もし彼が異国人であったなら、個人的に知られており、かつ信頼のおける第三者を紹介した個人の名前を加えた」⁷⁾。

かれらの取引の多様性と広がり、かれらの店舗に奴隷から採用した多数の人員をさらに抱えなければならなかった。出納係、伝達係、会計係、第三者の預金を受け取る責任のある従業員、通信のための書記を抱えていた。要するに、われわれの現代の銀行で見出す大部分の人員である。

われわれはギリシャの銀行が小切手の知識があるということをヘレニズムの銀行の処理から見出した。銀行はおそらく為替手形を利用していた。ヘレニズム的オリエントにおいて小切手の利用は頻繁であった。アテネの銀行が他の町に所有していた代理店のおかげで、これらの書類を他の場所へ送達することが可能であった。

銀行に対して別の役割が付与された。G.Perrotは想起的な方法で次のように記述している：「すこしづつ成り行きによって、何よりも貸付と呼べないと思われる業務を人々はアテネ銀行に望んだ。それは商業に従事する同国人との連絡であり、アテネ市場にしばしば訪れる外国人との連絡であった；銀行は自由人よりもすべての権利を守る形式と方法による契約を知っていた；銀行の事務所はアゴラに面する商業地区の中心にあり、そこで



(A.D.18年にギリシャ文字で、540ドラクマ銀貨の貸付とその受領の記録がパピルス上に書かれている。出所：Green W.L., "History and Survey of Accountancy", 1930, p.35.)

は、資本家、鉱山主、船主、船長、商人、投資すべき資金を保有している全ての者、借入を望むすべての者がそこで遭遇した。・・・取引を締結しようと望むなら、1枚のパピルスを取り出し、銀行によって証書を二部作成してもらおうとよい。ところで、ローマと異なり、アテネでは裁判所付属吏の制度を知らなかった。彼らが契約書を作成した後、信頼できる法律家として、かれらが必要なときに提出するために契約書自体を預けるという考え方を持つのは全く自然である。かれらのやり方でアテネの銀行はわれわれが証書の保管と送達と呼ぶものを最後に組織したのであった」。

アテネ銀行のこの大きな開花は非常に重要な要因によって促進された。アテネでは、金利は自由に決定された。いかなる法的制約もそのルールを妨げなかった。情勢によって利子は年12%から18%の間を変動した。一般的に、月利で計算された。海運業者の貸付利子は当然ながらより高利であり、30%から35%に達した。もし銀行がより熟練しかつ正直な者だけに貸付することによって賢明に船長を選んだならば、顧客が当座預金として預けた資本の一部を多数の貸付に用いることができた。

アテネの本質的に商業的な構造は少なくとも外国との関係において真正貨幣を持つことを余儀なくした。絶頂期のアテネ銀行はその当時の良貨を保有していた。すなわち、銀のドラクマと金のスタテレは非常に凝ったものであった。どこもかしこもそのようにはいかなかった。ギリシャの町の大部分はアテネの貨幣を改鋳した。ある者たちは、一方は外国用の通貨、他方には内国用のために改鋳されたものを保有していた。グreshamが後にその名をつけた貨幣法則に疑問の余地無く、貨幣は曲げられた⁸⁾。ともかく、至る所で、アテネの貨幣がもてはやされた。ギリシャの会計にとって、この貨幣の多様性は大きな困難をもたらした。なぜなら、異なる町の貨幣間での等価性を確立することが容易ではなかったからである。われわれは、政治的細分化は貨幣の多様性を生む同じ構造を中世においても知るであろう。

この研究は公共会計の歴史を取り扱うものではないとはいえ、紀元前の300年以上も前に、アテネが興味のある財政の監視制度をもっていたことに注目するのは興味深い。Cour de logistesと呼ばれる10人からなるの会計検査院があった。その役割は公的収入の計算を検証し、万一の場合、不正直な会計係を告訴した。第二の例として、collège des Euthymesと呼ばれる検査組織が機能していたことである⁹⁾。

注記（なお注記番号は連番に直している）

1) Emile Bourguet, Les comptes du IV^e siècle, dans Ecole Française d'Athènes Fouilles de Delphes T. II, fasc. V. Paris, E. De Boccard, 1932, p.v, 5.

2) Idem, p.v, 14.

3) Idem, p.v, 32-33.

4) T. Homolle, Les Archives de l'intendance sacrée de Délos, Paris, 1887を参照。F. Melis, op.cit., pp. 340-

359を参照。

- 5) 古代ギリシャの金融組織および会計技法の問題はG.Perrotの研究:Démosthène et ses contemporains(Revue des Deux-Mondes,15 nov.1873,pp.405 à 439.)において見事に統合されている。われわれは本章のエッセンスをそれに負っている。Edmond Guillard,Les banquiers athéniens et romains,paris 1875,passimを参照。
- 6) 用語trapeziteはtrapeza(訳注:机)からくる。用語banquierがbancoからくるように、机の背後には、中世のジェノヴァ銀行、ピサノ銀行およびフローレンス銀行が街頭に並んだ。
- 7) G.Perrot Dauphin-Meunier引用論文, op.,cit.p.28.
- 8) Guillaume De Greef,L'Economie publique et la science des Finances. Bruxelles,Larcier,1913,Tome II ,p.12.
- 9) Joseph Reiser,L'organisation de contrôle et la technique des vérifications comptables. Paris, Dunod, 1937, p.2.

なお、本文中の図は訳者が挿入したものである。